

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成21年 6月 第100号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

介護事業における新型インフルエンザ感染対策

5月16日に神戸の高校生が新型インフルエンザに感染している事が確認されてからは、小・中・高校の休校、施設での感染防止対策、デイサービス・ショートステイの休業、各種行事や会議の中止や延期、と慌ただしく緊張した一週間でした。

其中で、介護や保育の現場では、完全に休業した施設と、一部は稼働させた施設と、概ね半々に分かれました。日常の生活を支える介護や福祉の事業について、保険者である行政が画一的・形式的に休業を要請する事への疑問を感じた一週間でもあり、又、事業者の約半数が利用者の希望に対して柔軟に対応した事に少々安堵感も覚えました。

メキシコから始まった新型インフルエンザの感染がアメリカに伝わり、瞬く間に世界中に広がっています。日本の空港での水際作戦の様子をテレビで見て、完全防護服の防疫担当者の姿が、鳥インフルエンザで養鶏場の処理に向かう姿とダブリ、少々違和感がありました。

ゴールデンウィークにも多くの人々が海外へ旅行し、何時かは日本でも感染者が見つかる事は予測されましたが、5月10日に大阪の高校生が日本初の感染者として成田空港で確認されました。カナダで感染した可能性が高いとの報道の中で、カナダでは新型インフルエンザ感染に対して、一般的には人々がマスクを着用していない為に、自分たち日本人だけがマスクを着用する事にためらいがあった、と伝えていました。

そして16日に神戸の高校生の感染が発表され、兵庫県内という事に緊張感を覚えると同時に、彼らは海外渡航の経験がなく、何時何処で感染したのか、を確認する事も出来ず、既に多くの人と普段通りに接触している可能性が高い、という事で感染防止の困難さが頭をよぎりました。

更に、高砂の高校で練習試合をした事、加古川市に住む生徒も感染している事、が報じられました。この時点で、水際作戦といった特殊な対策では事が収まらず、街を行き交う人の中に保菌者が居る事を想定しなければならない、と思いました。

《次ページに続く》

せいりょう園 渋谷 哲



《前ページより》

そして同時に、季節性インフルエンザと同様の弱毒性であることが報道されており、日常的な暮らしの中でのマスクや手洗い等の感染防止対策が重要である事を認識し、我々にはノロウイルス感染対策での経験があり、飛沫感染に対するその教訓を生かすことが出来ると感じた次第です。

既に4月末に兵庫県担当部局からは、県内で1人でも感染者が出れば全ての学校や通所施設の休校・休業を要請する、との指示が伝えられており、基本的には休業する事として、16日の午後には利用者への個別の連絡に入りました。

デイサービスにしても、ショートステイにしても、利用者によってはサービスを利用する事が生活の安全と安定に直結する人があり、完全休業をしてしまうと、その様なご利用者の生活課題として、感染のリスクがより大きくなってしまいます。

『生活上の必要性があるので利用したい』との希望には応じる事を伝え、感染防止対策としてマスクの使用と手洗いの徹底をお願いする事、そして感染の危険性もゼロではない事を理解した上で、生活上の必要性についての相談をして、利用か否かの判断をご利用者に委ねました。

18日の夜には県・市からも『やむを得ず利用する場合には感染防止対策に留意して受け入れるように』との指示が入り、結果としては、毎日数人の利用を継続して一週間が無事に過ぎ、内心ホッとしています。しかし、必ず起こる事が予測される再度の発生に向けて、保険者と事業者と利用者との間で、感染防止についての介護・福祉事業の在り様を検討しておきたい、と願います。

新型インフルエンザに感染した生徒やその学校に対して批判が起きたり、風評被害が発生したりと、多くの地域で過敏に過ぎる反応が起こっています。この次の発生時には、ウイルスが強毒性に変化する可能性も指摘されており、自力で感染防止策の取れない人々の感染防止対策について、地域の人々や行政関係の方々とも共通する議論の場を持つ事が、是非必要だと考えます。

法定伝染病のように社会から隔離する事が求められる感染症ではない場合に、介護者と要介護者は、生活を共にする人同士が、感染のリスクを同程度に負担しながら、共に感染を回避する努力をする関係を結びたい、と考えます。

介護や福祉の現場では、ご利用者が日常生活をする中で感染のリスクを少なくする為に、自宅待機が効果的な人と、むしろ施設を利用する方が効果的な人と、個別の検討がより重要になってきます。学校と同列にしての画一的な休業ではなく、一人ひとりの生活を捉えて、ショートステイやデイサービスの定員や枠組みを超えて受け入れる事も考慮に入れながら、感染の防止と生活の安定に最も効果的な対応策の準備を整えて行きたい、と切に願っています。

其の為には、ご利用者と行政の方々や介護・福祉の事業者、そして社会福祉協議会を始め地域の皆様方を交えて、感染症の危険性を抱えて暮している現実を正確に理解しながら、適正な感染防止対策について話し合う場を是非持ちたいと願います。

ヒトリクラシ

機能訓練指導員 鍼灸マッサージ師 橋本 圭弘

「独り暮らしも恐くない」こんなタイトルの本がよく売れているようだ。人間若くて元気な内は、将来の不安などはあまり思い浮かべることもなく過ごせるが、年をとって、身近な人が死んだり、自分が病気になったりすると、途端に将来のことが不安になり、それが雪だるま式に大きくなったりすることがあるものだ。

今ここに、大家族で生活しているものも、独り暮らしをしているものも、みんな例外なく年をとってそれぞれが冥土に旅立って行くことは、何があっても100パーセント間違いはない。つまり人間の死亡率は100パーセントなのである。

そんなことを考えていると、なんとなく不安が募ってくる。あの世へ旅立ってしまえばそれでよいのであるが、その旅立ちに至るまでをどう処理してゆけばよいのかそれが問題なのである。たいていの場合、この期間に体が不自由になったり、病気をしたりして、人手を借りなければ生活ができない事態が起こってくるものだ。

最近、私の家内が膝関節を痛め、医師から入院手術になるかもしれないと診断され、もし入院となれば、光を失った私には、人手を借りなければ生活ができないという事態が迫ってきたのである。

そんなことがあって、私はワンルームマンションの一室を借りることにした。ここには介護スタッフが常駐していて、自分に異変があった場合、すぐにその異変を見つけて対処してくれると思ったからである。しかし、よく考えてみれば、これは私の勝手な思い込みであって、普通の家庭においてでも夫婦が同居しているながら、例えば、夫が、あるいは妻が風呂場で異変を起こしているのに、相方がしばらく、あるいはかなり長時間気が付かなかったという話を時々耳にすることがあるように、近くに居てもわからないことがあるものだ。

異変はどこで起こるかわからないが、例えば室内で起こった場合、そのとき緊急連絡が取れなければ、誰かがこの部屋に入ってくるまではわからないのが普通なのである。いくら介護スタッフが常駐しているとしても、用事もないのに再々部屋の中へ入ってくることはないだろうから、精神的な安心感はあるとしても、これまでどおりの自宅で生活しているのとさほど変わりはないような気もする。ただここでは、どんな異変でも長期間にわたって介護スタッフに見過ごされることはないだろう。

そんな事をも考え合わせて見ると、どこで生活していても完全無欠な暮らし方はできないというのが当たり前ののだということが自覚される。しかし、顔見知りの誰かが近くに居てくれると思うだけで、安心感は増すように思う。何はともあれ、今は介護付きマンションに入居したような気がして何となくハッピーな気分なのである。願わくば、このような気分がいつまでも続いてくれることを祈るばかりである。

ケアハウス等空き情報 <平成21年 6月15日現在>

ケアハウス

- | | | | |
|-----------|-------------|------------|-------------|
| ・むれさき苑 | : 1 人部屋 2 室 | ・青山苑 | : 2 人部屋 1 室 |
| ・シスナブ御津 | : 1 人部屋 2 室 | ・ウヰヰンガ はりま | : 2 人部屋 1 室 |
| ・香楽園 | : 2 人部屋 2 室 | ・恵泉 | : 若干 |
| ・ケアハウスアリア | : 1 人部屋 2 室 | ・第二ケアハウス恵泉 | : 若干 |
| | : 2 人部屋 1 室 | | |

[問合せ]せいりょう園介護相談室

(079)421-7156/(079)424-3433

介護者の集いー認知症サポーター養成講座ー テーマ「これからの介護保険の使い方」

せいりょう園老人介護支援センター
社会福祉士 吉田 知一

5月の介護者の集いは、新型インフルエンザが加古川市内でも発症が確認された最中にありました。県の要請で市内すべての通所サービスには中止をするように要請がありました。人が多く集まる場所でも、感染が拡大する可能性があり、多くのイベントや行事が中止されましたが、せいりょう園で行っている介護者の集いは開催させていただきました。今回の弱毒性の新型インフルエンザに対しては、生活の中に起こり得るリスクであると考え、日常で行っている手指の消毒や、隣の方と間隔を少しあけて座っていただくなどの配慮をさせていただくことで開催し、たくさんの方に参加していただきました。

今回のテーマは「これからの介護保険の使い方」です。介護保険が2000年に始まって9年目に入りました。介護保険がどのような保険であるかも、いろいろなところで目にすることがあると思います。今年4月には制度が改正になり、介護保険も最初の頃とはずいぶん内容が変わりました。そして、介護に対する私たちの意識も変わってきたようにも思います。介護は長男の嫁がすべきである、という風潮が今でもありますが、現在では介護は一人で抱え込むのではなく、様々な介護に携わる専門職が関わり、その人がその人らしく生活出来るように皆で支えるという、介護の社会化が浸透しつつあります。しかし、介護保険料を払っているからといって、必要以上の介護サービスの利用を希望されている方もあり、本人の出来ないところを支援する自立の為のサービスであることを理解されていない方が多いように思います。もう一度、介護保険がどのような制度なのか、どのような使い方が望ましいのか、おさらいの意味も含めて皆さんと一緒に勉強させていただきました。

まず、介護保険のサービスを利用されている方の中で認定調査が厳しくなったとの声をよく聞くことがあります。認定調査の捉え方としては、病気の内容や症状ではなく「介護の手間」が調査で反映されます。例え、全盲の方であったとしても、本人が住み慣れた家では、自分で出来ることが多く「介護の手間」がないので介護度には反映されにくいのです。

ヘルパー利用についても、して欲しいことと、実際に出来ることに開きがあると聞くことがあります。サービスを利用する際には、気づいたことがあれば、言いにくいことも伝えたほうが良いと思います。お互いが満足して利用する為には、その都度話し合い、信頼関係を築き、ケースバイケース臨機応変に対応できる関係が望ましいといえます。

○グループワーク

今回のグループワークもテーマにこだわらず、自由に考えていただきました。

テーマ「これからの介護保険の使い方」

これからの介護保険利用のポイントとしては、介護保険のサービスは本人の出来ないところをサポートする、自立支援のサービスである、ということを良く理解した上で、利用する側がどのように利用したら良いかを考えてみよう



グループの意見

- ・本人にとって良いサービスは何かを考えようとしても、介護をしていると日々葛藤し、話を聞いてもらいたいこともある
- ・家族との接点がありません、家族との信頼関係を築く為に連携が必要であると感じることがある
- ・町内会には、回覧が回ってきているが、なぜ町内の人はあまり来ていないのか？皆、関心がないのだろうか？

- ・保険者、被保険者の違いは何ですか？
- ・昔は、家で最期を看取っていくのが当たり前のことであったが、時代が変わってきているのかもしれない

この介護保険のサービスを利用する上で、お互いが満足して利用する為には、その都度話し合い、信頼関係を築き、ケースバイケース臨機応変にその人に則したサービスを考えなくてはいけないのだと思いました。制度は改正されますが、実際の介護においては、利用しにくい、提供しにくいと矛盾を感じる場合があります。この介護保険を上手く利用する為には、利用する側、提供する側が工夫しながら、本人にとって良い選択をし、介護を行っていくことがこれからの介護保険の使い方ではないか、と思いました。

「次回の介護者の集いは？」

6月の介護者の集い

テーマ「利用者の外出について」

7月の介護者の集い

テーマ「家族の役割、地域の役割」

6月 3日(水)	誕生会 音楽療法 自彊術療法	6月17日(水)	自彊術療法 音楽療法
6月 6日(土)	園長との懇談	6月18日(木)	野口南小学校交流会
6月 8日(月)	トライやるウィーク(~10日) 仏教講話	6月19日(金)	郷土料理の日(ごまだしうどん)
6月10日(水)	お話グループ・福寿草の会 自彊術療法 音楽療法	6月24日(水)	お話グループ・福寿草の会 自彊術療法 音楽療法
6月12日(金)	ひより手芸教室	6月26日(金)	介護者の集い ~利用者の外出について~
6月15日(月)	美容の日	6月27日(土)	木野雅之のマイリサイタル
		6月29日(月)	理容の日



今回の仏教講話は加古川町篠原町にある浄土真宗本願寺派、金照寺宰務(さいむ)ご住職に来て頂いた。開始までに時間があつたので、少しお話しさせて頂いた。私かよく理解していなかった「本願寺派」、「東本願寺」、「西本願寺」等々について恥ずかしながら質問する。浄土真宗には「浄土真宗本願寺派」と「真宗大谷派」とがあり、大谷派の総本山が東本願寺：お東さんと呼ばれるのに対し、本願寺派の本山「本願寺」は「西本願寺」お西さんと呼ばれるが、本願寺派という意味で「本派」とも呼ばれる。ご住職は今回お願いした講話の内容についてかなりお考えになつたご様子であつた。前半は一般的な内容で、最後に仏教的な話を少しと仰つた。

講話の開始。テーマは「老いを生きる」。医療技術の進歩により平均寿命は格段に延長して来ている。この事は必死で生き続けようとするだけではなく、病院に入れられ生かされているケースも決して少なくない。このことは、本人の意思とは関係なく家族に大きな負担を掛けることにもなる。老いの期間は長い。益々長くなってきている。言い換えれば「死」に直面している期間がとても長くなってきていることを意味する。長生きすることがよく「長寿」という言葉で表現される。辞書で調べると、長寿：長く生きたことを寿ぐ、祝うとある。心身ともに健全で長生きできれば、できてこそ長寿ではないか。生かされているだけでは長寿とは言えないのではないか？それは単に「長命」と言う方が適切ではないか？人間誰しも老いるし、死を迎えなければならない。老いを感じるとき、只それに悩み、落ち込むだけでは悲しい。長く生きてきたこと、生きてこれたことを素直に喜び、仏に感謝してはどうかとここで初めて仏教的な言葉を口にされた。

次に高齢者は如何な心を持って生きていくべきか？先ず日常的注意事項を三点挙げられた。

- * 転ばない、風邪を引かない、食いすぎない。
 - ・ 転ばない：転倒 骨折 寝たきり 機能低下
 - ・ 風邪をひかない：風邪 大病 衰弱
 - ・ 食いすぎない：食い過ぎ 肥満 病 余病の併発 大病

次に精神的な生き方、生活態度を三点。

- * しなやかさ、したたかさ、つややかさを持ち続けよう。
 - ・ しなやかさ：頑固でなく、柳に風と生きて、人に好かれる、それには感謝の心なのですが、信心があれば自然とそうなります。
 - ・ したたかさ：義理は自分を殺す。無理な付き合いはしない、いい子ぶらない、マイペース。
 - ・ つややかさ：いくつ何十になつても、そこはかとなく色香を保ち続けたい。

ここまで一般論としての「老いをどう生きるか」について話されたが、ここから宗教的な話をされた。人は「誰かに想われている」、「誰かに守られている」と感じると心豊かになれる。どこか遠くへ旅するときも同伴者がいれば心強い。しかし人と人との繋がりはその場限りだ。しかし、仏様に安らぎを覚え、縁が出来ると、仏様はずっと一緒です。

この世では友人、知人をつくれるが、あの世まで一緒することは出来ない。その日のためにも仏様と今から縁を結び、仏にまかせるという信心を持たれたらと存じます。

人はわが身の老いを正確に自覚しているか？ 大概は病気になって初めてそれを知る。老いとは衰えて行く事であり、それを正しく理解し、その苦しみを乗り越えようとする時、人は永遠なるものを求める。仏教界には「無量寿(むりょうじゅ)」という言葉がある。無限の寿命を持つものと言う意味で阿弥陀様の別名のひとつでもある。お遍路さんの笠には「同行二人(どうぎょうににん)」と書かれている。これは自分は一人ではない、いつも弘法大師とともにあると言う意味である。即ち御仏は常に私の側にいらっしゃって、信心をいただいたとき、私達衆生の苦しみを取り除き、安楽を与えて下さる。これを「抜苦与楽(ばっくよらく)」という。

講話の冒頭に仏教用語で「説法をしっかりと聞くことを『聴聞』と言います」と話されたが、その難しさを思い知りました。ありがとうございました。

介護現場発信情報

～ かけがえのない^{ひととき}一刻を

1年を振り返って

介護士 溝口 小夜

せいりょう園で働き出して早1年が過ぎました。私にとってこの1年は、成長し沢山のことを学んだ年でした。働き出し社会というものを知った時、自分は社会へ出てやっていけるのか不安でした。何度も失敗する度に自分に自信が無くなり、辞めたい時もありました。でもそんな時助けてくれたのが同期の職員と先輩でした。「失敗をするから次につながる」そんな言葉のおかげで失敗しても次はがんばろうと自信をもたせてくれました。

そして私がこの1年で学んだ事、成長した事は信頼関係がなければこの仕事は難しい事、自分の意志を持って行動する事でした。例えばトイレ介助や車椅子やベッドへの移乗。信頼関係がないと、相手へ不安や恐怖を持たせこちらに身体を預けてくれない。拒否をされる。でも信頼してもらえると身体を預けて不安や恐怖を持たずことなく介助を行なえると思えました。そして自分で信頼されるにはどうしたらいいのか考え行動していくうちに利用者の方との信頼関係ができたと思います。

私は人に対し、大きい声で話すことが苦手でした。何度も大きい声を出そうとしても言葉が出なかったんです。そしたら先輩達は「慣れたら大丈夫」と優しく言ってくれたり、声掛けの仕方も教えてくれました。そのおかげで大きい声も出るようになり、先輩にも誉めてもらい自分に自信を持つことが出来ました。

この先も自分に自信がなくなってしまうても絶対にあきらめず、自分の力で努力し成長し先輩職員のように信頼される人になりたいです。

Y子様のターミナルについて

ユニット型特養 介護士 川崎 賢一

Y子さんとはショートステイ利用の後、特養に入所となられたころから関わらせてもらい、自分のスタイルを持っておられる方だと思っていました。それは髪型のセットや水分の拒否など自分がこうと決めたら頑なに貫く頑固な方だったからです。

ユニット型特養と一緒に移り、今まで以上に関わらせてもらう時間が増え、そんな時に毎年5月の近況報告のお手紙を書かせてもらう機会がありました。そのことから、キーパーソンの家人に名前を覚えてもらうことが出来、Y子さんの昔話を聞くことで、よりY子さんを理解出来たように思いました。

そしてターミナル期に入り、水分・食事がほとんど拒否で入らない状態になり、今までの考え方であれば、食事や水分を少しでも多く摂取してもらうことが緩和ケアに繋がるのだと思っていましたが、Y子さんのケースでは食事・水分を頑なに口を閉ざし、開けてもらっても吐き出すという形でY子さんに苦痛なことばかりを行なっていました。そんな時に家人から聞かせてもらっていた言葉を思い出しました。それは、「おばあちゃんは人に何でもされるのが嫌で、私が髪を結ってもよく直されていました」という言葉です。そのことからY子さんはご本人の意志で食事・水分を拒否されているのだと感じました。それ以降、食事・水分を無理に摂ってもらうのではなく、最低限水やお茶で口腔内を湿らし、またY子さんは綺麗好きな方だったので、体の清拭や着衣を出来るだけ新しい物に着替えてもらうなど、Y子さんの意志を尊重した介助を心掛けました。

ターミナル期に入った頃より、毎日ご家族の方が入れ替わりに来て下さり、食事や水分、失禁交換をさせてもらう際にも一緒に立ち合っただけ、充実した時間をおくることができました。そしてY子さんの側でせりょう園での様子をご家族とお話させていただき、良い時間を過ごさせてもらったと思いました。結局最期を看取ることは叶いませんでしたが、このご家族とY子さんで過ごさせてもらった時間がすばらしいものだったので、私にとっては初めて悔いの残らないターミナル期だったと思っています。また、食事・水分を摂取するだけが本人の緩和ケアではなく、その方の生きてこられた背景を知り、その方の意志を最大限に尊重することが緩和ケアに繋がることを勉強させていただきました。次に活かせるように努力していきたいと思えます。